

## 前近代的身體と近代的身體

—日本近代における身體像についての一考察—

松 浪 稔

### はじめに

本稿は、前近代的身體と近代的身體の特徴をあきらかにすることで、日本近代における身體像について考察することを目的とする。

近代的身體とは、「近代」になって形成された身體、「近代」制度を支える身體であり、西洋的身體、国民化する身體といわれている。スポーツ史学会では近代的身體をテーマにこれまで二つのシンポジウムが行われた（「近代国民国家と体操運動」（1993年）「近代的身體の形成過程—日本の場合—」（1998年））。これらのシンポジウムでは、国民国家の形成に果たした体操運動の役割、衛生学が近代的身體の形成に果たした役割について議論された。前近代から近代へと移行するにあたり、「身體は国家によって管理され、国家に命を預ける身體を形成していくことになった（＝身體の国民化）。かくて国民の生と死までもが公共性をもち、前近代とは全く異なる身體が形成されることになった<sup>1</sup>」といわれている。しかし、それが具体的にはどのような身體であるかについてはあまり言及されなかった。

「前近代」から「近代」へ移行する境界はあいまいなものであるし、人間の身體は簡単には割り切れない。たとえば、明治維新以降を日本の近代としてとらえるとしても<sup>2</sup>、そこに生きた人々は一夜にして違ったからだの動き、違った考え方に変わったわけではない。近代的な制度や考え方に触れることで、時間をかけて徐々に、前近代的身體と近代的身體の往復が繰り返されながら、近代的身體へと移行していったのである。そして、近代から前近代を振り返ることで、ようやく失われたものとして前近代的身體があらわれるのである。

本稿ではまず、「前近代的身體」とはどのような身體であったのか、具体的にその様相を写真、図像などをとおしてあきらかにしたい。つぎに、「前近代的身

体」の対比としての近代的身体の特徴を浮き彫りにしていきたい。そうすることで、より明瞭に「前近代とは全く異なる身体」といわれる近代的身体がどのようなものであるか（あったか）があきらかにできるだろう。

## 1 前近代的身体の様相

前近代的身体とはどのような身体だったのだろうか。その手がかりとしてまず三浦雅士『身体の零度』<sup>3</sup>を取り上げたい。

三浦は、エリアスの『文明化の過程』<sup>4</sup>にならい、エラスムスの1530年に刊行されたという『少年礼儀作法論』にふれている。それは、「『少年礼儀作法論』に記されている禁止事項は、当時においてそれが決して珍しくなかったことを証しているからである。人は人の面前で排泄していたのであり、衣服で洩をかんでいたものであり、どこでも平気で唾を吐いていたのである。睡眠さえもが個人のもの、私的なものではなかったのだ。<sup>5</sup>」つまり、近代化以前のヨーロッパでは、このようなことが、ごく普通だったわけである。つづけて三浦は以下のように述べている。

エラスムスが『少年礼儀作法論』で詳細にのべているのは、大小便についてであり、人に見せてよい部分とそうでない部分の違いについてであり、そのほかそのほかである。これすなわち文明全体のトイレット・トレーニングのようなものだが、この過程で、と、エリアスはのべている、あたかも幼児が自我を確立してゆくように、ヨーロッパはその近代的自我を確立したのだ、と。<sup>6</sup>

人に見せてよい部分とそうでない部分を学び、みずからを律することで近代的自我が確立したのなら、それ以前の人前で洩をかみ、排泄し、唾を吐く身体は前近代的身体といえよう。<sup>7</sup>

また、パールバックの『大地』の主人公が、誰彼ともなくたかる蠅に対して持つ不快感について、三浦はこう述べている。

蠅が嫌われるのは、ほんとうは、それが無差別だからだ。壁という比喻を使えば、それは壁を無意味にする。自己と他者の区別を無意味にし、自己とその排泄物の区別を無意味にする。蠅は、赤ん坊の顔と同じように人の吐き出した痰の上にも群がる。自分にも群がろうとするのである。その無差別さは自己という壁を侵食するだろう。……中略……

自己と他者の区別があいまいな社会においては、蠅は注目されるべきものではない。うるさがられるのが関の山である。だが、自己と他者の区別が明瞭で、社会のあらゆる機構がその区別された個人を起点に構想される社会においては、蠅は絶滅されるべきものなのだ。<sup>8</sup>

この引用からは、近代は自己と他者の区別が明瞭な社会であり、前近代は自己と他者の区別があいまいな社会であると理解できるだろう。それゆえ、人前で、平気で排泄し、唾を吐き、洩をかむのである。

くわえて三浦は、日本人の動作について、武智鉄二による説明を援用し、日本人は身体動作においても近代化されたこと、近代的に歩くということは外国からもたらされたということ、日本古来の歩き方は「ナンバ」であるということ、「ナンバ」は整列行進にはむかないということ、さらに「戦闘に必要な機敏な動作」にも向かないということ<sup>9</sup>、兵式体操が日本人の身体を変えた<sup>10</sup>ということを指摘している。

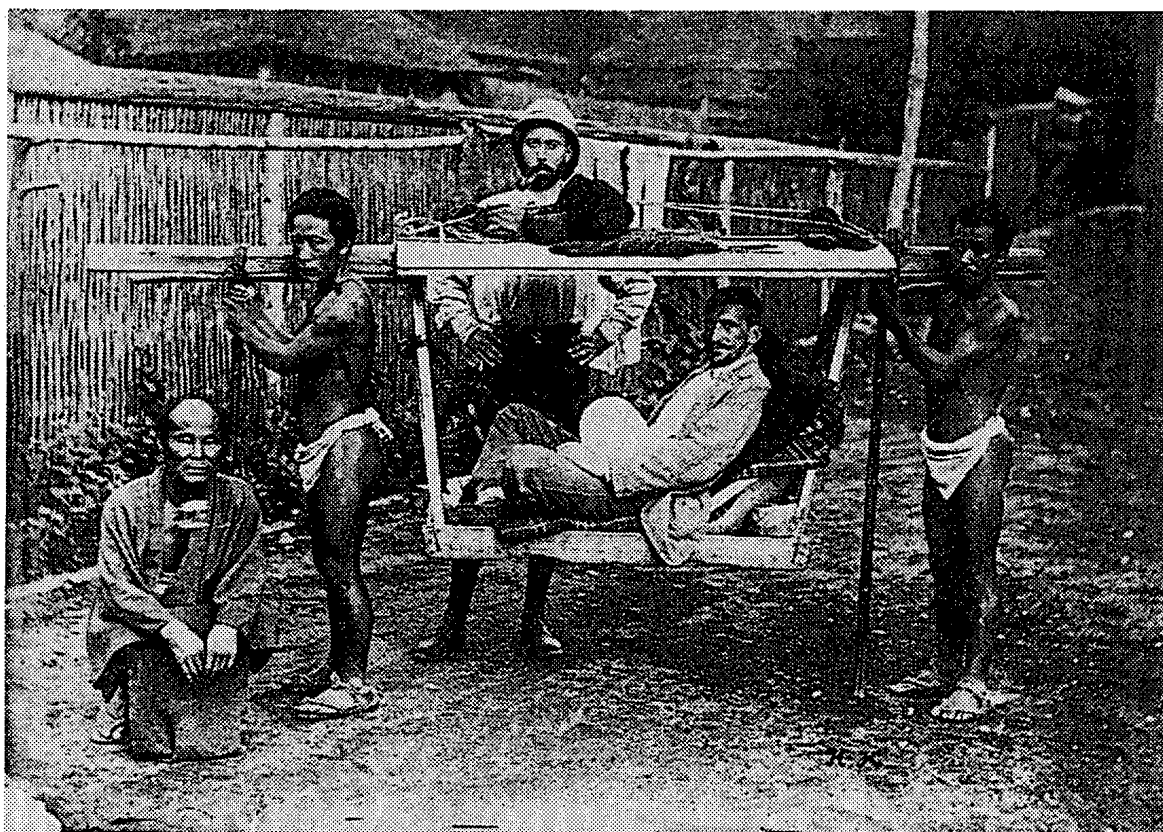
このように、前近代の身体とは、自己と他者の区別があいまいな身体である。そして、身体は近代的に加工され、矯正され、他者との間に自己という境界を引いたといえよう。

では、それは具体的にどのような身体なのであろうか。いくつかの図像を手がかりにしてあきらかにしたい。

明治期の日本人の姿をうつした写真集に『ボンジュールジャポン フランス青年が活写した1882年』<sup>11</sup>がある。乾板写真という当時の最新の技術で撮影されたこれらの写真は、外国人がみた日本人の姿を写真に収めているという点で、当時の日本の風俗や日本人の姿を現代に伝える貴重な史料である。

そこでまず、『ボンジュールジャポン』から、いくつかの写真を取り出してみたい。(写真1から写真4参照<sup>12</sup>) 時代はまさに日本が近代化へとむかっていたときである。前近代の身体から近代的身体へと移行する身体をみることで、前近代の身体具体的なイメージを持つことができるだろう。

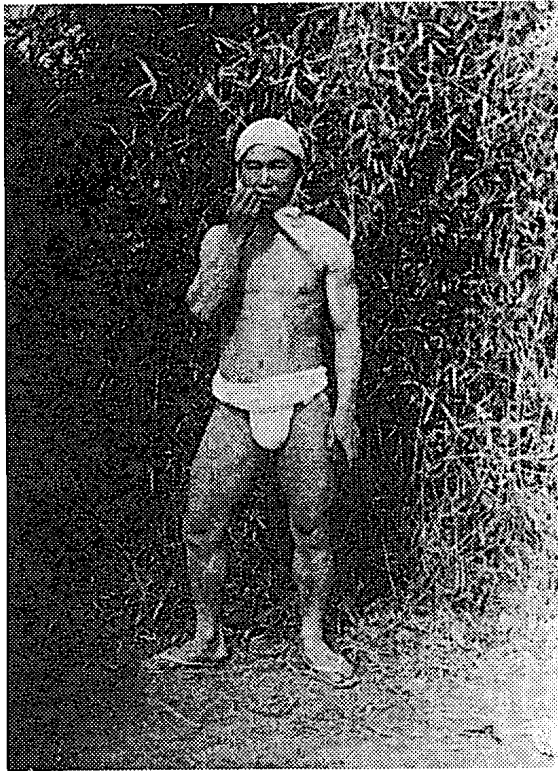
これらの写真をみると、明治15年ではまだ、丁髷姿や、禪一丁、禪に半纏といった格好が巷でよくみられたことがわかる。それから、車夫や、大工の腰の落ち着いた立ち方は、立つ姿勢の重心が低いことを示している。衛兵は洋装だが、まだ一般的ではなかった。前近代から近代への移行は、和装にあう身のこなし方から洋装にあう身のこなし方への移行でもあった。それは立つ姿勢や、歩き方など身体の動きも変化したことを示す。



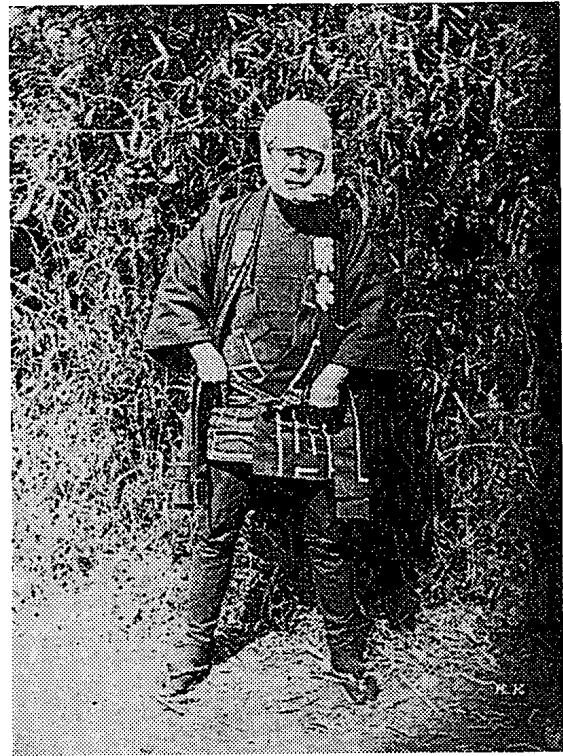
(写真1) 箱根 カゴに乗って



(写真2) 東京 皇居の衛兵 (左右とも)



(写真3) フンドシ姿で一服



(写真4) 大工の親方

つぎに、ジョルジュ・ビゴー<sup>13</sup>の絵<sup>14</sup>から、近代的身体になりきれない身体、前近代的身体をみてみたい。ビゴーが発表した漫画、版画、挿画、写生画等の数は3000を超える。その多くが日本人を書いたもので、これは「一人の外国人画家が十七年間にわたって明治中期の日本人を赤裸々に描写したものなのである。それらは「日本人とは何か」というテーマで貫かれている<sup>15</sup>」。それゆえ、ビゴーの絵は「絵に描いた日本人論」<sup>16</sup>ともいわれている。外国人画家がとらえた日本人の姿であり、ビゴーの絵には、多少強調はあるが、明治中期の日本人の姿がありありと描かれており、かつ日本人の特徴をしっかりととらえている。これがビゴーの絵を取り上げる理由である。勿論写真とは違い、その写実性について鵜呑みにすることはできないが、描かれた場面の特徴をとらえて製作していく過程で、強く意識的に表現されている部分こそ、考察の対象となると筆者は考えている。

眼鏡、細いつりあがった目、出っ歯、小柄というのは、いまでも外国からみた日本人のイメージとして定着している感がある。出っ歯、小柄というのは、最近では必ずしもあてはまらないが。ビゴーが描く明治の頃は、国民全体の栄養状態が悪く、それが原因で出っ歯や小柄な人が多かった（出っ歯と栄養摂取の悪さとは関係が深いという）<sup>17</sup>。また、ビゴーが日本人の容姿の醜悪さを必要以上に風刺したのは、日本の非近代的側面を強調する意図があったという<sup>18</sup>。以

下にとりあげた絵についても、この点については留意しなくてはならない。



(図1) 現代的敬礼と旧式の敬礼

『大日本』明治25年ごろ (『ビゴー素描コレクション1—明治の風俗—』より)

「現代的敬礼と旧式の敬礼」と題されたこの絵では、二つの挨拶の様式があらわされている。敬礼と土下座である。皇居前らしき場所で、下士官が上官に何かを伝えようとして敬礼している。一方その横では、この上官に下男が使いにやってきたのだろう、しゃがんで手をついて土下座している男がいる。兵隊の敬礼は当時、最新式のお辞儀といえる。新旧のお辞儀が対照的に描かれている。ビゴーには、しゃがみ姿が不思議なものに映ったようだ。しゃがんでいる姿を描いた作品が多数ある。しゃがむという動作を頻繁に行うには足腰が丈夫である必要がある。



(図2) 切符を買う三等車の乗客たち

『日本人生活のユーモア画集』第一集『東京・神戸間の鉄道』明治32年  
(『別冊太陽』、No.95「ビゴーがみた世紀末ニッポン」より)



(図3) 二等車……履物の陳列……下駄……

『日本人生活のユーモア画集』第一集『東京・神戸間の鉄道』明治32年  
(『別冊太陽』、No.95「ビゴーがみた世紀末ニッポン」より)



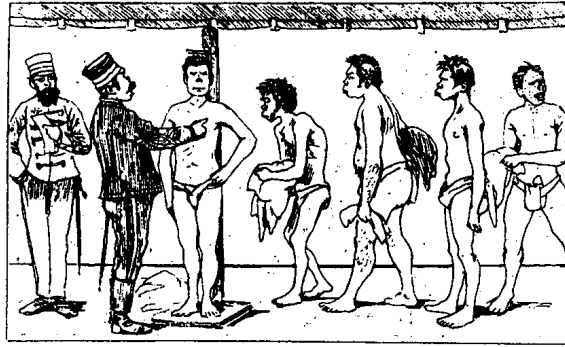
(図4) 一等車の乗客たち

『日本人生活のユーモア画集』第一集『東京・神戸間の鉄道』明治32年  
(『別冊太陽』、No.95「ビゴーがみた世紀末ニッポン」より)

図2から図4は、同じ画集に掲載されている。鉄道という新しい移動手段を利用する人々を描いている。図2は、三等車の人々の様子である。職人、商人、兵士、おかみさん、農民等々、一般庶民・大衆といわれる人々といってよい。着物姿に帽子、半纏姿に長靴、蓑笠姿の人物等々が、切符を買うのに、まっすぐ列を作るのではなく雑然と窓口に集まっているところが描かれている。

二等車の乗客(図3)は、中流階級以上の人だといってよい。腰をかける習慣がほとんどなかったため、靴を脱いで座席に座っている。履物も草履、靴、下駄と様々である。

一等車の乗客はお金持ちである。女性は着物姿だが、男性は洋装できめている。子供にも洋服を着せている。二等・三等車の乗客と比べると、その居住まいの違いがよくわかる。



(図5) 身体検査の助言者

『日本人生活のユーモア画集』第2集『兵士的一天』明治32年  
(『ビゴー日本素描集』より)

「身体検査の助言者」というこの絵は、徴兵検査の現場である。禪一丁の壮丁が身長をはかるところだ。「検査担当の将校が、「背骨が曲がっている、もっとむねをはれ」とか「不潔な奴だ、たまには風呂に入れ」とか「そんな体じゃお国のために役立たんぞっ!」などと有難い助言を与えている」場面だ<sup>19</sup>。このように身体が測定され、優劣が判定されたのである。

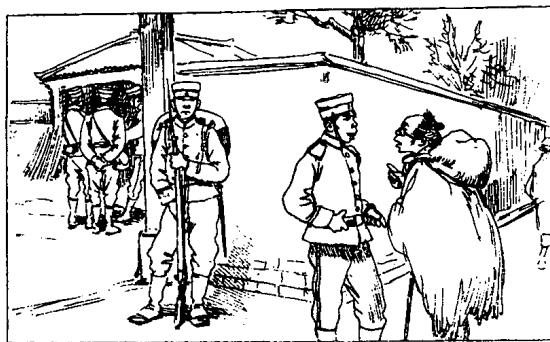


(図6) 新兵の招集

『日本人生活のユーモア画集』第2集『兵士的一天』明治32年  
(『ビゴー素描コレクション1—明治の風俗—』より)

図6のように、徴兵検査の合格者は貧富や学歴に関係なく召集対象者であった。それゆえ、はだしの貧乏人から洋装の金持ちまであらゆる階層の青年が集まった。<sup>20</sup>





(図7) 叔父と甥

『日本人生活のユーモア画集』第2集『兵士的一天』明治32年  
(『ビゴー素描コレクション1—明治の風俗—』より)

図7では、若い兵士が面会に来た叔父と兵營の前で立ち話をしている。兵士の洋装と、叔父の衰姿が対照的だ。「幕末以来、近代化に最も早くから着手してきたのは軍隊であり、軍服着用はすでに幕末から始まっている。したがって、この若い兵士は近代化された日本を象徴する格好をしており、その叔父はチョンマゲという旧態依然の姿である。叔父と甥という身近な仲に近世と近代が併存している日本社会をビゴーは興味深く思ったのである。<sup>21)</sup>

前近代的身體は、近代的身體に対する謂いであり、近代化していく身体と対比した時に初めて、近代的身體とは違う身体としてあらわれると考えてよい。ここでは、文献と図像を手がかりに前近代の身体から近代的身體へと移行する身体のイメージをあきらかにすることを試みた。

日本の場合、前近代の身体から近代的身體へと移行する際、身体が近代の(西洋の)制度に適応するようにつくりかえられた。たとえば裸になる習慣、丁髷、服装、座り方などの身体技法が、切り捨てられたり、変容を余儀なくされたりしたということが理解できるだろう。

## 2 近代的身體の特徴

近代的身體は「近代」の制度を支える身体であるから、おのずと近代という時代の特徴をあらわしている。本項では、前近代と近代の特徴を対比することで、近代的身體の特徴をあきらかにしたい。

稲垣は『体育史講義』<sup>22)</sup>の中で、「時代精神の対語的理解」として、中世と近代の特徴を対語的にあらわしている。(表1)<sup>23)</sup>のとおりである。ここでいう中世は

前近代と同じ意味である<sup>24</sup>。そして、この表について、以下のように述べている。

「中世」と「近代」の対立点を一語で表現するとすれば、ひとつは「近代合理主義」という言葉に集約できるのであろう。とりわけ数量的合理主義は「近代」を分析していくうえできわめて有効な方法のひとつといってよい。「より少ない力で最大の効果」をあげようとする「近代」の効率主義に対し、「中世」では「全力をあげて忘我没入」する「過程」重視の論理が浮びあがってくる。このような近代合理主義が、数量化できない人間の感性や情動の価値よりも、数量化しやすい人間の知性や理性の価値に傾斜していき、ついには自然科学万能の機械技術文明にゆきついた結果が、「近代」における物質的豊かさと「心の貧しさ」を招来することとなった<sup>25</sup>。

(表1) 時代精神の対語的理解

| 〔中世〕  | 〔近代〕 |
|-------|------|
| 主観主義  | 客観主義 |
| 直感性   | 論理性  |
| 自俗主義  | 普遍主義 |
| 個性的   | 没個性的 |
| 受動的   | 能動的  |
| 非合理主義 | 合理主義 |
| 宇宙性   | 現実性  |
| 偶然性   | 必然性  |
| 遊戯性   | 勤勉性  |
| 感性    | 知性   |
| 象徴性   | 反象徴性 |
| 総合的   | 分析的  |
| 過程主義  | 効率主義 |
| 多義性   | 一義性  |
| 情動    | 理性   |
| 記憶化   | 記録化  |
| 地方主義  | 国際主義 |
| 抽象化   | 数量化  |

(稲垣正浩、「近代スポーツの誕生とその背景」、岸野雄三編著、『体育史講義』、大修館書店、1984年、P.96より)

近代合理主義、とくに数量的合理主義は、近代という時代の特質のひとつを顕著にあらわしている。同時にそれが近代的身体の特徴と考えてよい。とすると、近代的身体は、数量化される身体といいかえることができるだろう。その

結果、「近代」における物質的豊かさと「心の貧しさ」を招来することになったと稲垣はいうが、同時に、人間の身體が、数量であらわすことのできるモノとして扱われるようになったことをも意味しているといえるだろう。

また、北澤一利は、「身」と「身體」の比較として、江戸時代と明治維新以降の身體を比較している（表2<sup>26</sup>）。北澤は「身」<sup>27</sup>という言葉で江戸時代の人々のからだ、「身體」という言葉で明治以降の人々のからだを説明している。<sup>28</sup>

（表2）「身」と「身體」の比較

身（江戸時代）

身體（明治維新以降）

| 特徴   | 主観的          | 客観的          |
|------|--------------|--------------|
| 構造   | 境界が不明瞭な袋構造   | 明確な輪郭を持つ模型構造 |
| 乳児   | 必要な気をもって生まれる | 未熟で生まれる      |
| イメージ | 単純、抽象的       | 複雑、具体的       |
| 理念   | 世俗的、個別的      | 一般的、理論的      |
| 内部   | 価値の高い貴重品     | 外側を支配する      |

（北澤一利、『健康』の日本史』、平凡社新書068、2000年、P.137より）

身は「境界が不明瞭な袋構造」、身體は「明確な輪郭を持つ模型構造」だと対比させている。既述のとおり「前近代の身體とは、自己と他者の区別があいまいな身體である。そして、身體は近代的に加工され、矯正され、他者との間に自己という境界を引いた」のだ。

このように対比することで、近代的身體の特徴がより具体的になるだろう。また、このような特質を備えた身體が近代的身體なのである。

前近代的身體から、近代的身體に移行するということは、ここで対比されたような特質、諸条件を獲得していく過程である。そして、それは「自己の身體はここからここまでだ」と、自己の身體の境界線をはっきりと引くことだともいいかえられよう。自己の境界を明確にすることで、自己以外の他者を排除し、または自己の中に取り込む（「否定性」）こととなったのだ。

また、近代的身體への移行は、近代制度への適応の過程ともいいかえられる。たとえば、洋装への移行、法制度への適応、戸籍制度の確立による身體の把握など様々な面から、身體が国家によって管理されることとなった。この意味において近代的身體は国民化する身體である<sup>29</sup>。そして、国民化した身體は、国民という複数の集合体として扱われ、それを構成する個としての身體はそ

の個性をなくし、省みられることがなくなってしまう<sup>30</sup>。

近代的身体は自己と他者の間に明瞭な境界線をもちながら、数量で把握され国民化される。そこにナショナリズムがあらわになるといえるだろう。それは、人間が単独では存在しないからだ。個の存在を確認するには他者からの承認が必要だからであり、この言説から、個の存在に他者を含んだ共同体が優先することになる。この共同体が、国民国家を意味したとき、人間の身体は共同体（国民国家）の要請によって、「従順な身体」、「規範化された身体」<sup>31</sup>へつくりかえられたのである。

この過程を、西川長夫は『国民国家論の射程』<sup>32</sup>の中で、「国民統合の前提と諸要素」と「国民化（文明化）」という二つの表において示した。（表3・表4参照<sup>33</sup>）これらは、近代国民国家形成にいたる前提をモデル化している。

（表3）国民統合の前提と諸要素

|  |       |
|--|-------|
| ① 交通（コミュニケーション）網／土地制度／租税／貨幣一度量衡の統一／市場……植民地           | ←経済統合 |
| ② 憲法／国民議会／〔集権的〕政府—地方自治体（県）／裁判所／警察—刑務所／軍隊（国民軍、徴兵制）／病院 | ←国家統合 |
| ③ 戸籍—家族／学校—教会（寺社）／博物館／劇場／政党／新聞〔ジャーナリズム〕              | ←国民統合 |
| ④ 国民的さまざまなシンボル／モットー／誓約／国旗／国歌／暦／国語／文学／芸術／建築／修史／地誌編纂   | ←文化統合 |
| ⑤ 市民（国民）宗教—祭典（新しい宗教の創出、伝統の創出）                        |       |

（西川長夫、『国民国家論の射程』、柏書房、1998年、P.6より）

表3は「国民統合を大きく経済統合、国家統合、国民統合、文化統合の四項目に大別し、それぞれの項目に該当する国家装置やイデオロギー装置（アルチュセール）を並べ<sup>34</sup>」ている。フランス革命を念頭において作成されたものであるが、日本の国民国家形成を考える場合にもあてはまると西川はいう。日本の国民国家形成を支えた近代的身体は、このような諸要素を前提とした身体である。

表4では国民化を5つの側面から示している。これはそのまま身体につづる。国民化された身体とは近代的身体である。つまりこの表から、近代的身体は、空間、時間、習俗、身体、言語と思考が国民化した身体だと理解できる。くわえて西川は、国民化された身体について以下のように述べている。

国民化された身体が、祖国のために死ぬことを望み、国民化された身体が

他の國民を殺すことを名譽と感じる。その身體を流れている血液を送り出す鼓動は、いまだ自然のリズムであるが、その精神と身體の規律は、近代的な、つまり國民國家的な時間と制度によって与えられているのである。……中略……人間はある歴史的な時代の中で國民化され國民という存在になるのだということである。それを私は「人造人間」とか、「怪物」と呼んだのであるが、今も誇張であるとは思わない。<sup>35</sup>

(表 4) 國民化 (文明化)

|             |  |
|-------------|--|
| ① 空間の國民化    | 均質化、平準化された明るく清潔な空間／国境中央 (都市) — 地方 (農村) — 海外 (植民地)／中心と周縁、風景 |
| ② 時間の國民化    | 曆 (時間の再編)、労働・生活のリズム／神話／歴史                                  |
| ③ 習俗の國民化    | 服装、挨拶、儀式 (権威—服従)／新しい伝統                                     |
| ④ 身體の國民化    | 五感 (味覚、音感、……)、起居、歩行—学校・工場・軍隊等々での生活に適應できる身體と感覚／家庭           |
| ⑤ 言語と思考の國民化 | 国語／愛國心   |
| ↓           |  |
| ナショナリズム     |  |
| 國民の誕生       |  |

(西川長夫、『國民國家論の射程』、柏書房、1998年、P.6より)

西川のこの二つのモデルには、近代的身體へ移行する前提と諸要素、ナショナリズムの基底となる國民化の過程が示されている。そしてそれは、空間、時間、習俗、身體、言語と思考において國民化されることで、個としての身體ではなくモノとして扱われる身體が誕生したことを示している。

## おわりに

近代的身體の特徴を、前近代と近代の特質の対比から考察した。身體が近代化するということは、近代という時代の特質を獲得していくことであり (例えば、自己と他者の境界線を明瞭にする。近代合理主義の名のもと、身體を数量化、没個性化して把握する)、その行き着いた先が、スポーツ場面においてはドーピング (近代スポーツもまた、近代という時代の特質を顕著にあらわしている。) であり、医療場面においては臓器移植といった身體のモノ化であると

いってよいだろう。

身体が国民化することは、国民国家を支え、国家を存続させるという点から、大変都合のよいことだった。しかし、その結果として、人間の身体が「数と凡庸」のなかに埋もれてしまい、いのちが省みられることのない身体が近代的身体として姿をあらわしたのである。日本近代が求めた身体はこのような身体だったのである。

## 注

- 1 谷釜了正、「本シンポジウムの主旨」、『スポーツ史学会第12回大会発表抄録集』、P.4
- 2 本研究では、日本の近代化のはじまりをおおよそ明治以降と設定する。これは、明治以降に本格的に西洋的な制度を取り入れ、西洋に伍することの出来る近代国家としての日本を確立しようとしたからである。西谷修「日本における〈主体〉形成の冒険」、『世界史の臨界』（岩波書店、2000年、PP.141-161）を参照されたい。
- 3 三浦雅士、『身体の零度 何が近代を成立させたか』、講談社選書メチエ31、1994年
- 4 ノルベルト・エリアス著、赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳、『文明化の過程 ヨーロッパ上流階級の風俗の変遷』（上）、法政大学出版局、1977年  
ノルベルト・エリアス著、波田節夫・溝辺敬一・羽田洋・藤平浩之訳、『文明化の過程 社会の変遷／文明化の理論のための見取図』（下）、法政大学出版局、1978年
- 5 三浦雅士、『身体の零度』、P.61
- 6 三浦雅士、同上書、P.65 傍点引用者
- 7 ノルベルト・エリアス著、赤井ほか訳、『文明化の過程』（上）では、「第二部 第四章 食事における振舞いについて 第五章 生理的欲求に対する考え方の変遷 第六章 洩れをかむことについて 第七章 つばを吐くことについて 第八章 寝室における作法について 第九章 男女関係についての考え方の変遷 第十章 攻撃欲の変遷について 第十一章 騎士の生活（目次 PP. v-vii）」というように、目次がたてられていることからあきらかなように、エリアスは、本書で人間の風俗の文明化について述べている。これは、人に見せる部分と見せない部分について、不快感と羞恥心を覆い隠すこと、または人に見せないことについての変遷を文明化として語っているといえよう。なお、ここでエリアスがいう「文明化」と「近代化」は、ともに、近代という時代に適応するために身体を作り変えていくという点においてよく似たニュアンスを持っているといえる。が、勿論全く同じではないことは留意しなくてはならない。
- 8 三浦雅士、『身体の零度』、P.91
- 9 三浦雅士、同上書、P.132
- 10 「むろん、象徴的な物いいであって、厳密に考証すれば、反論の余地はいくらでもあるだろう。」三浦雅士、『身体の零度』、P.152

- 11 ウーグ・クラフト著、後藤和雄編、『ボンジュールジャポン フランス青年が活写した1882年』、朝日新聞社、1998年

クラフトは世界一周旅行の途中で日本に立ち寄り、日本の人物、風俗を数多く写真に残した。

- 12 写真に記されたHKの文字はクラフトが納得のいく写真に書き入れたサインである。

また、『ボンジュールジャポン』では、車夫の写真が多く掲載されている。クラフトが「一日に65キロ走った陽気で疲れ知らずの車夫たち (P.20)」に大変興味を持ったからだ。現代のわれわれにとっても、一日に65キロ走るといふ車夫たちの身体には、脅威と感嘆をおぼえるだろう。

なお、これらの写真はクラフトによってポーズが指定されたとも考えられる。それをさしひいても、明治期を生きた人々の身体像をうつしたものとして史料価値が十分にあると考えられる。

- 13 ジョルジュ・フェルディナン・ビゴー Georges Ferdinand Bigot 1860-1927

フランスの画家。官吏の父と画家の母の間にパリで生まれたビゴーは美術学校（エコール・デ・ボザール）に学び、ゾラやルイ・ゴンスらを通じてジャポニズムの影響を受け、日本美術研究のため1882（明治15）年21歳のときに来日（ウーグ・クラフトが来日する約半年前）。当初は大山巖の紹介で画学教師として陸軍士官学校に勤めた。のちに、司法省旧法学校フランス語教師、仏学塾フランス語教師、改進黨新聞専属画家などをつとめる。1887年から横浜居留地で『トバエ』をはじめ数々の風刺雑誌・風刺画集を刊行、日本人や日本政局を辛辣に風刺した。日清戦争直前の極東情勢を風刺した、日本人と清国人が朝鮮という魚を釣ろうとしているところを橋の上からロシア人が横取りしようと釣竿を持ってのぞいている絵などは、日本史の教科書にも採用されよく知られている（『漁夫の利』とキャプションがつけられていることがあるが、原題は「魚釣り遊び」）。1894年8月から4ヶ月間にわたって『ザ・グラフィック』の特派員として日清戦争に従軍。翌年佐野マスと結婚、一子をもうけた。条約改正により居留地の治外法権が撤廃され、おもうように活動できなくなったビゴーは1899年17年間滞在した日本を離れ、帰国。帰国後は挿絵画家として活躍し、1927年、パリ郊外の自宅で心臓発作のため死去した（67歳）。（清水勲、『ビゴーが描いた明治の女たち』、マール社、1997年、芳賀徹・清水勲・酒井忠康・川本皓嗣編、『ビゴー素描コレクション』、岩波書店、1989年）

- 14 なお、本研究でとりあげたビゴーの絵は、以下の著作によるものである。

『ビゴー画集』、酒井忠康解説、岩崎美術社、1973年

清水勲、『明治の風刺画家・ビゴー』、新潮社、新潮選書、昭和53年

清水勲、『ビゴー日本素描集』、岩波文庫、1986年

芳賀徹・清水勲・酒井忠康・川本皓嗣編、『ビゴー素描コレクション 1—明治の風俗—』、岩波書店、1989年

芳賀徹・清水勲・酒井忠康・川本皓嗣編、『ビゴー素描コレクション 2—明治の世相—』、

岩波書店、1989年

芳賀徹・清水勲・酒井忠康・川本皓嗣編、『ビゴー素描コレクション3—明治の事件—』、岩波書店、1989年

清水勲、『続ビゴー日本素描集』、岩波文庫、1992年

『別冊太陽』、No.95 Autumn 1996、ビゴーがみた世紀末ニッポン、1996年、平凡社

清水勲、『ビゴーが描いた明治の女たち』、マール社、1997年

清水勲、『ビゴーが見た日本人』、講談社学術文庫1449、2001年

清水勲編著、『明治の面影・フランス人画家 ビゴーの世界』、山川出版社、2002年

- 15 清水勲、『ビゴーが見た日本人』、P.19

- 16 清水勲、同上書、P.4

- 17 清水勲、同上書、P.42

- 18 「ビゴーがことさら日本人の容貌の醜悪さを諷刺して描いたのは、日本の非近代的側面を強調することによって条約改正がまだ時期尚早であることを主張しようとし、それには貧相と非近代化をこじつけることが最も理解されやすいと判断していたからである。」(清水勲、『ビゴーが見た日本人』、P.44)

以上のような指摘がある。ビゴーは横浜の外国人居留地に住んでおり、治外法権の恩恵にあずかっていたからだ。しかし、ビゴーが強調して描くことで、よりその当時の特徴が表現されているともいえよう。

- 19 清水勲、『ビゴー日本素描集』、岩波文庫、1986年、P.44

- 20 「軍当局は入営当日の心得として「なるべく木綿衣に木綿袴を着用のこと」「所持金は3円位まで」「時計などの貴重品は持ち込まないこと」「付添人等は多く伴わないこと」「盛大な旗幟を建てた見送人は辞退すること」などとあり、さらに「入営の時は満面笑味をもって雀躍して入隊すべし」といった注文をつけている」という。(清水勲、『ビゴー日本素描集』、P.46)

- 21 清水勲、『続ビゴー日本素描集』、岩波文庫、1992年、P.94

- 22 岸野雄三編著、『体育史講義』、大修館書店、1984年

- 23 稲垣正浩、「近代スポーツの誕生とその背景」、岸野雄三編著、『体育史講義』、P.96

- 24 ここでは稲垣は、「前近代」という用語ではなく「中世」と言う用語を使用している。これは、近代以前の時代を「中世」そして「近代」の後の時代を「現代」とする時代区分をしているためである。それゆえ、ここでいう「中世」とは近代の前の時代を指し、「前近代」と同義であると考えてよい。

- 25 稲垣正浩、「近代スポーツの誕生とその背景」、岸野雄三編著、『体育史講義』、P.97

- 26 北澤一利、『「健康」の日本史』、平凡社新書068、2000年、P.137

- 27 北澤は「身」について以下のように説明している。

「身は身体のように一定不変の物質的存在ではなく、位置や形が定まらない不安定な場所のよう」であり、「身は世間という身近で現実的な要因によって定まり、しかもそれは一定でなく絶えず移り変わり、この先どうなっていくかも不安定」で、「これに



加えてさらに「身」は、みずから行為の主体にはなりません。…中略…身は、能動的、主体的に動くものではなく、常に受動的で依存的な存在だったようです。

また、「江戸時代の人びとが持つ「身」のイメージは主観的で、明治以降の人々が持つ「身体」のイメージは客観的です。主観的というのは、想像や推測、好みや願望を大切にして表現することをいいます。また、客観的というのは、これとは反対で想像や推測、あるいは誇張や装飾を持ちこまずに事物に忠実に記録することをいいます」。(北澤一利、同上書、PP.127-129)くわえて、「身体は全身がすべて均質な素材でできていると考える」という。(P.145)ならば、表1にあげた中世の時代精神と対応するものであると考えてよいだろう。

「身」という言葉について、市川浩の一連の「身」について論考にふれておく必要があるだろう。市川は「身」について「第一に、われわれが具体的に生きている身体のダイナミックスを大変よく表現している。それから第二に、精神—物体あるいは精神—身体という二項図式とは異なったカテゴリー化の可能性を示しているのではないか、そういう可能性をはらんだ言葉として使いたいと思ったわけです。(市川浩、『〈身〉の構造』、講談社学術文庫1071、1993年、P.79)」「〈身〉は、自然的存在としての充実を意味する〈実〉に近い〈肉〉から、いわゆる精神的存在としての〈ころ〉までをふくむ人間的現実の、たえず生成し、解体する成層的網目構造を表現する。(市川浩著 中村雄二郎編、『身体論集成』、岩波書店、岩波現代文庫 G64、2001年、P.37)」と定義している。心身二元論ではとらえきれない人間(身体)をこの「身」という言葉であらわしていると理解してよいだろう。

北澤は『「健康」の日本史』の主要参考文献に市川浩の著書をあげていないが、北澤が、心身二元論ではとらえきれないコスモロジーを持つ江戸の身体をやはり「身」という大和言葉で表現しているのは、市川の著作を念頭においたものだろう。

- 28 また、「身」に対する「養生術」、「身体」に対する「健康法」というように養生と健康を区別し、その比較をおこなっている。(北澤一利、『「健康」の日本史』、P.170)
- 29 国民化の過程において、徴兵令による国民皆兵の原則と、戸籍制度による身体の把握は、国民国家への帰属を強めるばかりか、国民国家の束縛から逃れることができないことを意味している。
- 30 近代社会は〈マス〉の社会、不特定多数の大衆の社会である。この不特定多数の大衆は、どれも同じで区別がつかず、多数あって取り替えも補充も可能な〈数〉で数えられる存在である。逆に、この〈数〉に入れてもらうにはあらゆる特性を削ぎ落として他人と同じに、〈凡庸〉にならなくてはならない。

たとえば、戦争が物量戦になれば、兵士(〈国民〉)の能力よりも兵器の能力が問われ、兵士はただ兵器を扱う者になる。それゆえ取り替え可能な〈数〉で数えられる存在として扱われ、徹底的に非個性化し、平準化、無名化して「消費」される消耗品となる。(西谷修、『夜の鼓動にふれる 戦争論講義』、東京大学出版会、1995年、PP.95-98)

- 31 ここに「ディシプリン」(フーコー)および「ハビトゥス」(ブリュデュー)の作用が

あると考えられよう。これらは身体技法を支えているという点で注目すべき概念である。

- 32 西川長夫、『国民国家論の射程』、柏書房、1998年
- 33 西川長夫、同上書、P.6
- 34 西川長夫、同上書、1998年、P.38
- 35 西川長夫、同上書、1998年、PP.43-44

また、西川は国民についてつぎのように述べている。

「国民とは、国家によって祖国愛を強制された存在である。国民とは、祖国愛を、自己の生命を賭し、見も知らぬ相手を「敵」という名称ゆえに好んで殺戮するという驚くべき狂気にまで高めることを余儀なくされた存在である。」(P.28)

西川は近代的身体を持った人間を「人造人間」であり「怪物」であるという。近代的身体に作り変えられるという点では「人造人間」という比喻もあてはまるし、また、他者を殺戮するという点では「怪物」であろう。